金 聖響／神奈川フィル

今井信子（va）、下野竜也指揮東京都響

オーケストラ　神奈川フィルハーモニー管弦楽団（第288回）

3月2日・横浜みなとみらいホール●金聖響（指揮）●池辺晋一郎「交響曲第8番《大地／祈り》」（神奈川フィル委嘱作品／世界初演）、レーガー《ヒラーの主題による変奏曲とフーガ》Op.100、ラフマニノフ「交響曲第2番」

この定演で最も感興をそそられたのが、委嘱作の池辺の交響曲だった。3楽章で書かれ、第1、3楽章には〈大地から〉〈祈り〉の副題がつく。第2楽章は聴く人の自由な想念に委ねられていた。そして作曲家は、あの3・11が、新たな交響曲に投影されたと言及する。大自然と人間との関わりについての思考を主題にし、音楽をすすめた。低弦による大地の鳴動を思わせる第1楽章冒頭、いっときの抒情的歌謡は膨らみ炸裂する。金管を基に音楽の高鳴る短い第2楽章は人間の不屈な心か。そしてストイックな祈念の歌。金の指揮と神奈川フィルの誠実で真摯な演奏は、いたって感銘深く、見事な初演だった。

次のレーガー作品は、普段聴ける機会が少ない。ヒラーはライプツィヒ・聖トーマス教会カントルだった作曲家だが、レーガーがヒラーの劇音楽を主題にし、11の変奏とフーガを書いたもの。多種多様の変奏が結構愉しい。そこでは指揮はオーケストラを縦横にドライヴし、機能性いっぱいにアンサンブルの美を表出。

そしてラフマニノフでも、ロマンに溢れた躍動する音楽を、たっぷり堪能させた。が、収穫は池辺作品。

●小山 晃

オーケストラ　今井信子 va、下野竜也指揮東京都交響楽団

3月3日・東京オペラシティ●下野竜也（指揮）、東京都交響楽団、ダニエル・アウストリッヒ（vc）●モーツァルト「協奏交響曲」K364、バルトーク「ヴィオラ協奏曲」、J.S.バッハ（ラフ編）「シャコンヌ」、武満徹《ア・ストリング・アラウンド・オータム》

世界的なヴィオラ奏者今井信子の70歳を記念するコンサート。アウストリッヒ（vc）、下野竜也指揮東京都響との共演。まず、モーツァルトの「協奏交響曲」の第1楽章。硬質だが明るく華やかなヴァイオリンと柔らかなヴィオラが好対照。第2楽章では親密な対話が快く、上述の相違が淡い陰影をもたらす。バルトークの「協奏曲」ではヴィオラの音色はさらに深まり、あらゆる情念が際立つと同時に芸術的な高みに昇華されている。難技巧も含めて自由闊達。緊張と弛緩、拍子の変化などオケともよく合い、ソロは音を丁寧に印象深く奏で、大きくて品格のある演奏を聴かせた。ラフ編曲「シャコンヌ」に続いて、今井が初演者を務めた武満の《ア・ストリング・アラウンド・オータム》。切り詰めた表現と多彩な音色という同曲の魅力そのままの演奏で、そこから引き出される透明な詩情に溢れた清冽な響きが作曲者自身の名を冠したホールに美しく映える。終演後、聴衆と共に誕生日を祝う場面もあり、末永く記憶に残るであろう充溢したひと時だった。

●那須田 務

オーケストラ　オーケストラ・アンサンブル金沢（第29回東京公演）

3月14日・サントリーホール●井上道義（指揮）、ボリス・ベルキン（vn）●モーツァルト「交響曲第40番」「2つのヴァイオリンのためのコンチェルトーネ」、プロコフィエフ「ヴァイオリン協奏曲第2番」、《古典交響曲》

モーツァルトの「交響曲第40番」「2つのヴァイオリンのためのコンチェルトーネ」、およびプロコフィエフの「ヴァイオリン協奏曲第2番」《古典交響曲》――という興味深いプログラムだったが、音楽監督の井上道義は体調不良のため協奏曲のみを指揮、他はコンマスのアビゲイル・ヤングの弾き振りによる演奏となった。指揮者なしの3曲もヤングの奮闘と楽員たちの自発性によりまとまりのある演奏になってはいたものの、井上が振っていればもっと大胆不敵で躍動的な表情になるだろうにというもどかしさはどうしても抑えきれない。その井上が指揮し、ボリス・ベルキンがソロを弾いたプロコフィエフはさすがに圧巻で、オーケストラは俄然多彩な音色となり、ベルキンの明確な構築性と自然な感興に満ちたソロに対し、鮮やかな絡み合いを聴かせていた。なお「コンチェルトーネ」ではヤングとベルキンがソロを協演。

●東条碩夫

オーケストラ　東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団（第267回）

3月16日・東京オペラシティ●宮本文昭（指揮）、千々岩英一（vc）●シベリウス「ヴァイオリン協奏曲」、ショスタコーヴィチ「交響曲第5番」

宮本文昭が音楽監督としての最初の年度の最後を締め括る定期演奏会。当日のコンサートマスターは松野宏明が務めた。

シベリウスの協奏曲の独奏者は、パリ管弦楽団副コンサートマスターの千々岩英一。千々岩のヴァイオリンは、第1楽章冒頭から音が美しく保たれ、表現に節度が感じられた。第2楽章の弱音表現も素晴らしい。甘美な音色も聴く。ただし全体を通して、音程など、演奏の精度を上げる余地が残されていた。宮本の動的な指揮と合わせにくいところもあったのかもしれない。

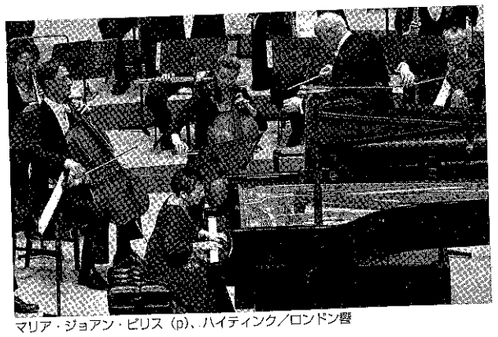
後半はショスタコーヴィチの「第5番」。宮本はアグレッシヴに攻める情熱的な指揮（いささか「喚き声」が気になったが）。オーケストラも熱く応え、引き締まった密度の高い音を奏でる。その烈しい音楽は多少緻密さを欠くが、訴えかける力が大きい。第4楽章、宮本は、オーケストラに思い切り音を出させ、コーダでは限界まで速いテンポを採った。宮本らしい、クールやスタイリッシュとは対極にあるショスタコーヴィチ演奏を楽しむことができた。

●山田治生

オーケストラ　読売日本交響楽団（第524回）

3月19日・サントリーホール●シルヴァン・カンブルラン（指揮）●マーラー「交響曲第6番《悲劇的》」

読売日響の第9代常任指揮者のカンブルランは、就任してちょうど3年目を迎えるが、読売日響をもはや完全に自己の手中に収めている模様であり、このオーケストラを自在に操って、自分の表現の意図をほとんど思うままにアリゼしたといえる演奏を聴かせていた。彼の棒から紡ぎ出されるサウンドは、フランスの指揮者特有の豊かな色彩感や細やかな芳香を漂わせていた反面、硬質で凝縮された辛口の低音や弾力性のある強靭なリズムを特色としており、そうした特性から骨太なデッサンで綴られたダイナミックで立体感に富んだ作品像が彫琢されていた。そして、ゆるぎない構成力に裏付けられた彼の楽曲の把握は、作品の全体像を見事に描出する結果を生んでいた一方、細部の仕上げの精妙さにも非凡な水準を示しており、ブリリアントな緊迫感の持続が聴き手を最後まで捉えて離すことがなかった。最後のクライマックスに向かって自然的なエネルギーの高揚が実現されてい


マリア・ジョアン・ピリス（p）、ハイティンク／ロンドン響

小川典子（p）、プレトニョフ／東京フィル

たフィナーレは、中でも圧巻であり、疲れをみせないブラス・セクションの渾身の熱演も特に光彩を放っていた。

●柴田龍一

オーケストラ　ロンドン交響楽団

3月10日・横浜みなとみらいホール●ベルナルト・ハイティンク（指揮）、マリア・ジョアン・ピリス（p）●ベートーヴェン「ピアノ協奏曲第2番」、ブルックナー「交響曲第9番」（ノーヴァク版）

ベルナルト・ハイティンクの来日は2009年シカゴ響に帯同して以来。今回は、これも共演の多いロンドン響が相手だ。ブルックナー「交響曲第9番」がメインの横浜公演を聴いた。

ひと言でいえば楷書体のブルックナー。緩急による味つけは最初の主題提示からかなり濃いのだが、いわばトメやハネを殊かにしない。強奏時のややメタリックな響きも、おそらくはそのために、品格を保てるのだろう。ただ、次に筆を下ろすまでのアクションに、以前のハイティンクにはなかった遅れが忽ち込んでいなかったか。結果、流れるべき音楽というより、風景画が目の前に1枚、また1枚と画かれてゆく心持がした。

とはいえ、風景画そのものは至極丁寧。第1楽章コーダ前の総奏で、ヴィオラの同音型反復があんなに聞こえることはまずないし、第3楽章の頂点へ向けての長大な絵巻など、その濃密さに息を飲む。そして頂点の、身を割くような不協和音にも。

前座はベートーヴェンの「ピアノ協奏曲第2番」。マリア・ジョアン・ピリス絶好調。左手の雄弁なこと！

●舩木篤也

オーケストラ　東京フィルハーモニー交響楽団（第76回）

3月14日・東京オペラシティ●ミハイル・プレトニョフ（指揮）、小川典子（p）●ラフマニノフ「ピアノ協奏曲第2番」「交響曲第2番」

2003年以来しばしば東京フィルに客演しているミハイル・プレトニョフが、オール・ラフマニノフ・プログラムを指揮した。

「ピアノ協奏曲第2番」では小川典子が独奏を務めた。彼女のしっかりとした重みのある明確な打鍵は、ラフマニノフの音楽にふさわしい。しかも彼女の演奏は、スケール感でも音量でも、オーケストラに負けていない。内面からの情熱があり、緩徐楽章では、ニュアンスに富み、音楽が単調にならない。プレトニョフは曲を知り尽くしたサポート。絶妙なテンポの伸縮も施す。

後半の「交響曲第2番」でプレトニョフは、より自在にオーケストラを操り、説得力ある表現を生み出した。この曲でもアゴーギクは行うものの、甘美な旋律ではむしろ速めのテンポを採るなど、音楽を決して甘ったるくしない。音色も明るくはしない。その意味でかなり辛口なラフマニノフだったといえよう。ラフマニノフ作品で重要なヴィオラなど中低音の充実が音楽に厚みを持たせ、管楽器の一体となった太くて重い響きがまさに口シアを思わせた。

●山田治生

オーケストラ　東京ニューシティ管弦楽団（第86回）

3月20日・東京芸術劇場●内藤彰（指揮）、木田左和子（p）●シマノフスキ「交響曲第4番《協奏曲風》」、マーラー「交響曲第1番《巨人》」

内藤彰指揮の「マーラー新校訂版」シリーズ第2弾は「交響曲第1番」。前半には、ピアノ・ソロに木田左和子を迎えたシマノフスキ「交響曲第4番《協奏曲風》」。シマノフスキの管弦楽には、神秘性・印象派風の音色変幻などが溶け合い官能的とも言える響きが醸し出される。「第3番」で声と溶け合わせ成功させたシマノフスキは、「第4番」でピアノと共存させた。不協和な混濁でこの世ならぬ境地を出現させるオケに、緊張感を孕む音色で神秘的な地平をくっきりと煌めかせるピアノの役割を、さすが、シマノフスキに造詣の深い木田は果たしていた。

《巨人》では、第1楽章から明るく、バランスの良い響きを形成していた内藤は、第3楽章中間部「彼女の碧い眼」では夢見るような甘い美しさをオケから引き出し、そして第4楽章最終のコラール部分の新校訂版の注釈によりホルンに金管を補充し突出した響きや、その直前のベルアップし屹立した木管、作品冒頭4度動機を表情の濃い表現で回帰させたオーボエなど、それまでのバランスの良さは壊れ失せていく。新校訂版が浮かび上がらせる作曲家の飛翔する意識を先入観なく掘り起こし、その胸中に迫る挑戦だったと言えよう。

●小倉多美子

オーケストラ　東京都交響楽団（第748回）

3月22日・東京文化会館●アンドリュー・リットン（指揮）、伊藤恵（p）●プロコフィエフ「《ロメオとジュリエット》第3組曲」「交響曲第4番」、モーツァルト「ピアノ協奏曲第21番」

ベルゲン・フィル音楽監督のアンドリュー・リットンが東京都響に再登場。この日は前半にプロコフィエフ「《ロメオとジュリエット》第3組曲」、モーツァルト「ピアノ協奏曲第21番」ハ長調K467が、後半にプロコフィエフ「交響曲第4番」が演奏された。リットンはおおらかで陽性のテンペラメントの持ち主。一枝一枝逡巡しつつ盆栽を剪定するような音楽づくりではなく、作品を大局的に把握して希望に満ちた確信のもとダイナミックに進む。だから、細部の微妙な表情づけや陰影の表出にはやや乏しいが、奏者一人ひとりが長所を出しきって屈託なく演奏している観があり、それが曲の真髄を聴き手に伝えることにつながった。今の都響の力は非常に大きいだけに、リットンのような細部に拘泥しないのびやか系指揮者を迎えることは互いにプラスに働くようだ。プロコフィエフの2曲のうちでは交響曲に聴き応えがあり、十全に機能したオーケストラの透明度の高い響きと各楽器の高い技術を堪能した。モーツァルトのソリストは伊藤恵。いつもながら誠実で真摯なアプローチによる、まさにモーツァルトの王道というべき演奏。弦楽器も忌憚なくヴィブラートをかけてよく歌い、ソロによく寄り添った。

●秋谷由喜子